

日本マーケティング学説史考

—大泉行雄・商業の本質への根源的学究者—

小 原 博

目 次

1. はじめに（大泉行雄研究）
2. 『商業本質論』（1942年）
3. 商業学と経済政策学研究のはざま
4. おわりに

1. はじめに（大泉行雄研究）

今日の流通マーケティング学研究⁽¹⁾にとって、他の多くの学問と同様に学説史的考察は、「学問の歴史は学問そのものである」⁽²⁾との至言が古くからあるように、意味大きいものがある。本稿はその一環から、大泉行雄（1901-1979）の所説を取り上げる。大泉は、第二次大戦を間に挟む半世紀にわたって、主として商業学、経済政策学を研究・教育してきた大学教授である。

その学究生活は、（旧制）小樽高等商業学校、ついで東京商科大学を卒業後に、（旧制）高松高等商業学校に赴任することから始まる。戦時中の軍属としての時期を除き、戦後も（高松高等商業学校さらに高松経済専門学校の後身）香川大学経済学部で引き続いて教鞭をとった。香川大学では経済学部長、また学長も務めている（定年後は神奈川大学、さらに近畿大学に勤務している）。

その生涯の足跡をたどると、研究、教育、さらに学務行政と、大学という教育の場であって、まことに真摯な学究者であった。大泉行雄の略歴は以下のようである。



大泉行雄（1901-1979）

- | | |
|-------------|--|
| 1901(明治34)年 | 北海道旭川市生まれ。小樽にて、尋常高等小学校、道庁立小樽中学の卒業を経て、 |
| 1919(大正8)年 | 小樽高等商業学校に入学、大熊信行教授（1893-1977）や、大西猪之助教授（1888-1922）らに指導を受ける。 |
| 1922(大正11)年 | 小樽高等商業学校を卒業。 |
| 1922(大正11)年 | 東京商科大学に入学、上田貞次郎教授（1879-1940）らに師事。 |
| 1925(大正14)年 | 同大学卒業。 |
| 1925(大正14)年 | 高松高等商業学校講師、「商業通論」「倉庫論」を担当。 |
| 1926(大正15)年 | 高松高等商業学校教授、「商業 |

- 通論」「倉庫論」「税関論」「貨幣論」「商業政策」「社会政策」等を担当。
- 1935(昭和10)年 文部省在外研究員として商業学および経済政策学研究のためドイツに留学。オーストリア、イタリアを巡る。
- 1937(昭和12)年 さらにアメリカでの見聞を経て帰国。
- 1942(昭和17)年 陸軍司政官，第二次大戦中，陸軍に所属。
- 1946(昭和21)年 高松経済専門学校（←高松高等商業学校）教授に復帰。
- 1949(昭和24)年 香川大学経済学部（←高松経済専門学校）教授。
- 1950(昭和25)年 一橋大学より経済学博士の学位を受ける。提出論文は『経済生活の本質に関する職能論的並びに職分論的考察』，翌年公刊。
- 1953(昭和28)年 香川大学経済学部長。
- 1958(昭和33)年 香川大学長。
- 1964(昭和39)年 香川大学を定年退職。神奈川大学法経学部（経済学部）教授。
- 1971(昭和46)年 近畿大学商経学部教授。
- 1979(昭和54)年 逝去，享年77。

- (1942)『現代商業の基本問題』（同文館）
- (1942)『商業本質論』（同文館）
- (1951)『経済生活の本質』（同文館）
- (1961)『新商業論』（関書院）

2.『商業本質論』（1942年）

大泉行雄の数多い研究業績の中から，ここでは75年前になる代表的著作『商業本質論』を吟味する。いうまでもなく過去において本書は，研究者にとっては周知の文献であったし，のみならず，一般読者にとっても書名からして興味を惹かれるものであったろうと思われる⁽⁶⁾。その内容は以下のような構成になっている。

目次

- 第1章 商業原理
- 第2章 人間生活と経済
- 第3章 経済生活の発達と商業
- 第4章 商業の本質
- 第5章 商業の分化
- 第6章 商業の経営
- 第7章 物財の流通
- 第8章 国際商業の問題
- 第9章 商業における職分思想
- 第10章 商業統制の問題

なお，大泉は前述の通り，真摯な学究者であるが，その人となりについて⁽³⁾ふれておこう。大泉は「学問上・思想上の立場がどうであれ，学者としての秋霜烈日の操守と，一貫してゆるがない学問への熱情，しかしまたそれを大きく包む人間的洞察力のゆたかさ」を持っていると，学問に対する姿勢を門下の木村正身が評している⁽⁴⁾。またこれに関しては，大泉自身の手になる『自然と人と生活』をはじめ，さまざまなエッセー集⁽⁵⁾や新聞記事等によっても，行間からそれなりに理解できるように思われる。

大泉の主題に係わる業績は，以下の5点あるが，本稿ではその中心的な研究業績の1つである『商業本質論』を扱う。

- (1931)『商業原理講話』（同文館）

大泉行雄の本書における立場，考察態度はどのようなものであるのか。結論から言えば，商業の本質を把握するために，職能論的方法を採用するところにある。したがって本書における中心は，第4章，さらに第9章とである。

大泉以前，それまでの伝統的な商業学においては，商業の本質あるいは意味を解明するにあたり，まず商業活動の単位として企業たる経営体を抽出し，これの組織・構成・活動形式，すなわち売買，交換，あるいは配給（＝流通）に出発点をもとめて，分析考察し，そこから最後にこの経営体が持つ全体への効果を明らかにしようとするものであった。

これに対して，大泉は，何よりも先に経営体としての商企業が存立を許さるべき全体が取りあげ

られ、この全体関連性のうちに商業の存立意味が捉えられるとする。このことは、国民経済の全構成において商業はそもそも如何なる地位を与えられるかが問われ、そこからまたその地位における働きが自ら明瞭にされる、こうした考察態度を職能論的本質把握とするのである。したがって、職能とは本来全体における位置の獲得とそこでの任務の遂行を意味している。こうした基本的考察から、やがて（職能の主体的自覚としての）職分の課題が解明されるともいう。

なお、大泉にはこれより先、(1931)『商業原理講話』がある。その内容構成は以下のようである。

目次

- 第1講 学問—商業学
- 第2講 商業の発達（その一）
- 第3講 商業の発達（その二）
- 第4講 商業の本質
- 第5講 配給機能の効果
- 第6講 商業人の人的要求
- 第7講 商業の非人的要素（その一）
- 第8講 商業の非人的要素（その二）
- 第9講 配給主体の組織（その一）
- 第10講 配給主体の組織（その二）
- 第11講 商品配給行程（その一）
- 第12講 商品配給行程（その二）
- 第13講 小売商業問題
- 第14講 国際商業問題と其の政策
- 第15講 将来の商業

このように『商業本質論』は、先立つ10年ほど前の『商業原理講話』と、内容がかなりの程度でオーバーラップしており、大泉の基本的研究のあり様に大きく変わりがないということである。とくに『商業本質論』出版は、第二次大戦たった中、1942（昭和17）年4月の発刊であり、統制経済下であるという状況が異なっているのみである。その外箱の帯には、日本出版文化協会推薦の辞として、以下の文言がある。

「統制の進行は経済生活の各分野に著しい変革をもたらし、商業もまたもとよりその例外ではな

い。最近においては往々商業無用論さえも出てくるに至っている。この時にあたって商業の本質を究明し原理的立場から問題に答えることは最も必要のことである。本書は広く国民経済の観点から商業の本質を明らかにしたるものであり叙述の平明と魅力は教養書として完璧に近い。従来あるいは形式的に配給売買として把握されまたあるいは単独に経営体の立場から考察され来った商業は今や著者の職能的把握方法によって、その国民経済的な作用を明確にされた。時代の要請たる商業倫理の昂揚にも資するところ大なるものがある。広く教養層に推薦する次第である」（旧仮名遣い・カタカナ表示を現代遣いに直している；小原）。教養啓蒙書としての紹介・推薦文であるが、内容はそう簡単というわけではない。

大泉が『商業本質論』において検討した結果、その内容は以下のように総括することができる。

- ① 商業は人間社会生活の一面であるから、時代とともに変化する。だがその変化するものは、商業の表現形態および形式であって、その変化の奥には変わらない要素が存在する。商業の本質という場合は、この変わらぬ要素をいう。
- ② 商業の表現形態および形式とは、商業の経営体の組織・構成などについての態様と、この経営体が商業活動を実行するときのやり方をいう。これは時代・国民・文化等の相違によって絶えず変化する。
- ③ 商業の不変の本質とは、人間生活の根底に横たわる事実に出発するものである。それは、無限の欲求に対し有限の目的物しか存在しないという経済の基本事実に他ならない。ここで、物財の需要者とその供給者とを連結結合させ、その各々の欲求を適合調和させなければならない。この職能が商業の本質を成すものである。
- ④ 商業の本質を交換、売買あるいは配給（＝流通）として把握することは、上の本質の具体的な実践形式を取り上げることである。本質論としては、職能の意味把握まで立ち至ら

ねばならない。配給そのことが商業ではなくて、配給によって何が全体社会の上で成就されるかが商業の本質を決定するものである。

- ⑤ 商業の本質は、これを要約すれば全体経済関係における需要供給の適合作用といえる。これが商業の職能である。商業職能の重点は、職能ということが単なる活動ではなくて、全体の上で如何なる役割をつくすかという所にある。
- ⑥ 商業の職能論的本質把握は、自由経済を前提とはしているが、自由経済から統制経済あるいは計画経済へと移行していく場合にも、その意味を失うものではない。というよりも、この職能論的本質把握をもってしなければ、経済の統制あるいは計画化は遂には理解しえない。商業の形態および形式は経済体制により変わっていくとしても、商業の職能は依然としてそのまま存在する。その職能が如何なる形式によって達成されるかが究明されるべき問題だからである。

なお「本質論」なる書名について少考しておこう。その1点は、本来的に学問を深めようとする学究者にとって、その学問の拠って立つ中身の根本は何か、これこそが自身の研究のスタートラインであり、ゴールラインでもある。その研究業績から、商業の本質を捉えること、商業学の根本を据えることに大泉は当初から熟考してきた結果と、理解できる。このことは、本書の前提となる数々の商業の本質に関する論文が本書以前に明らかにされてきたことから分かる⁽⁷⁾。

他の1点は、前例に倣ったことでもあろう。小樽高等商業学校における恩師の一人として大熊信行(1893-1977)がいるが、大泉の『商業本質論』出版より5年前、大熊(1937)『経済本質論—配分と均衡—』(同文館)で、同様な「本質論」をすでに使っていることである。大泉は、大熊の研究方法を尊敬の念をもって見倣っていた、また後に続く者として、商業と経済の違いはあれ同様の趣旨から書名としたと思われる。

とはいえ、大熊信行は小樽高商では、1921～

1923年とその在職期間は短い。大泉にとって、大熊は学校は違えども同じ高等商業学校出身者でもあり、期間の長短とは関係なく、少なからず影響を受けた恩師であったといえる⁽⁸⁾。

また、大泉にはこの『商業本質論』の後継書として、(1951)『経済生活の本質—職能と職分の問題—』(学位論文の公刊)がある。他方、大熊にはさらに(1941)『経済本質論—配分原理第一巻—』日本評論社；(1954)『経済本質論—計画経済学の基礎—』(第二版,1955)東洋経済新報社、と続いている。このように大泉と、大熊の両者にとって、本質論議が共通するキーワードであった。

いずれにしても、大泉の『商業本質論』は出版当時の商業のおかれた立場、経済統制の中で、商業者の整理統合や、転廃業、高等商業学校進学希望者の激減など「明日の商業に対し輝かしい前途を見出す者は極めて少なくなった」(状況で)「この時に当たって商業の本質を独自の立場から闡明しようとした書の贈られたことは、恊に意味深い」と、出版直後に室谷賢治郎(小樽高商)が評価している⁽⁹⁾のは至当である。

3. 商業学と経済政策学研究のはざま

大泉の『商業本質論』を、前節ではその内容を把握することにおかれた。ここでは流通マーケティング学に係わる学説史上、それ以前の諸説に対して、大泉のそれは如何なる位置づけを与えられるのかを吟味しておこう。

近代日本の学制、とりわけ高等商業教育において、東京高等商業学校(=東京商科大学)の果たした役割は大きい⁽¹⁰⁾。そこでの教授陣は、商業学関連領域研究の最高峰というべき位置にあった。これについては小原・既稿等ですでに検討済みであるが⁽¹¹⁾、以下、若干ながらふれておこう。草創期のこれらについて、既稿では4つの世代に区分して提示している。

第1世代

水島鋈也(1864-1928)ら。

第2世代

佐野善作 (1873-1952), 福田徳三 (1874-1930), 關一 (1873-1935) ら。

第3世代

内池廉吉 (1876-1949), 小林行昌 (1876-1944), 石川文吾 (1877-1946), 三浦新七 (1877-1947), 上田貞次郎 (1879-1940), 左右田喜一郎 (1881-1927) ら。

第4世代

向井鹿松 (1988-1979), 谷口吉彦 (1891-1956), 福田敬太郎 (1896-1980), 緒方清 (1896-1934), 増地庸治郎 (1896-1945) ら。

第1世代には水島鏡也をおいている。日本で第2番目の高等商業学校として神戸にも開校される。神戸高等商業学校 (=神戸大学) がそれで、1902年の開校に水島は初代校長となり、23年間その職を務めて基礎固めをした。専門は銀行・金融論であるが、校長として著しい功績を残して、神戸高商の存在を確かなものとした。

この第1世代につぐ第2世代も明治20年代に東京高商を卒業しているが、第2世代には、佐野善作、福田徳三、關一らをあげることができる。佐野善作は銀行・金融論関係であるが東京高商校長・学長として21年間にわたり貢献した。また福田徳三は経済学者 (経済原論・経済史) としてよく知られるとともに、次代の上田貞次郎の恩師でもある。また商業学関係としては關一を上げることができるが、残念ながら学究生活は40歳までで、後には大阪市の助役、市長として名を馳せ地方自治に貢献した。その著書『商業経済政策』はよくまとまった著作であるが、経済学にウエイトが置かれている。

この3人は、より学問的香りの高い高等教育機関としての基礎作りする時期にあたっており、彼らは東京高商の一時代を画し「一橋の3秀才」と呼ばれたといわれる。

これらの第1, 第2世代は、おおむね明治期にあつて、「初歩的な『商事』の枠組」段階とでも特徴づけることができる。商業学校や高等商業学校の基礎づくり (付属商業教員養成所が1899年=明治32年に付置されている) に大きな足跡を

残した。いずれも日本の高等商業教育のその初期の段階で、教育・研究の第一線にあつたといえる。

ついで第3世代は、明治30年代の東京高商卒業で、母校で教鞭をとった者として、内池廉吉、石川文吾、三浦新七、上田貞次郎、左右田喜一郎らをあげることができる。「商業学とは何か」の問いに正面から答えるのは、左右田を除く人々である。左右田は商業学関係ではないが、経済哲学の領域で一世を風靡し、学問方法論の面で他の同僚に影響を及ぼしたとみられ、大正期には福田徳三、三浦新七らとともに看板教授であつたという。

その当初の東京高等商業学校の中で、内池廉吉 (1906) 『商業学概論』, 石川文吾 (1910) 『商業通論』, 三浦新七 (1903) 『商業経済学』など、第3世代により、陸続と商業学書の出版がされている。そうした中でとくに上田貞次郎の所説 (1905) 「商業学」 『商業大辞書』 所収 (同文館) を含め、上田の存在が大きき、商業学関連姿勢には学ぶべき点が多い。いずれにしてもこの第3世代は、明治から大正期にあつて、「商業学の『科学』志向の論議」段階とでも特徴づけることができる。とはいえ、商業学の確立・発展については、年令は近いものの、その門下の第4世代の研究者に委ねることになる。

第4世代は、上田ら第3世代に教えを受けたもので、福田敬太郎、緒方清、増地庸治郎らがより専門性を高めて存在した。大泉は1922 (大正11) 年に東京商科大学に入学したが、当時の教授陣の中でも、上田貞次郎に師事しており、上田は43歳と働き盛りであつた。

この第4世代は、日本独自の「配給論」を形成することになる。中心は向井鹿松、谷口吉彦、福田敬太郎らで (向井、谷口は東京高商出身ではない)、彼らは「三つの秀峰」あるいは「巨大な学峰」と称され、日本独自の「配給論」を形成することになる⁽¹²⁾。第4世代はいわば「商業学から『市場論』『配給論』への変容」段階とでも特徴づけることができる。

かくして、第1世代から第4世代までにおいて、当初の商業要項・商事要項から、商業通論、

商業学へ、さらに市場論・配給論へという、学問の発展の系譜がみられる。

こうした経緯で、第4世代で、より内容を深化させた向井鹿松、谷口吉彦、福田敬太郎、また増地庸治郎らに続き、大泉行雄はこの第4世代にほぼ重なるような位置にあるといえる。大泉の『商業本質論』も内容的に基本的ではあるが、より吟味を増したものとなったといえよう。

すなわち、商業の本質論議の視点からは、向井鹿松の配給組織体説＝商品の社会的移転のための労働を組織的に行う経営体即商業説、谷口吉彦の商品の社会的移転現象即商業説、福田敬太郎の取引企業説がある。いずれも第二次大戦前の学説で、古典的配給論の範疇に属する⁽¹³⁾。これに対して、大泉は全体経済関係における需要供給の適合作用こそが本質であり、これが商業の職能であるとしている。このような主張からは、諸説の存在と大きくかけ離れた内容のものではない。とはいえ、大泉の理論・主張は、戦後に至ってもその存在は向井、谷口、福田の評価に比べ十分とはいえず、忘れられた存在でもあった⁽¹⁴⁾。

他方、大泉は略歴で自明なように、(旧制)小樽高等商業学校を経て東京商科大学を卒業しているが、これら「商業」は専攻学問的に大泉にとっても離れがたい領域である。また学制的に当時、こうした各地の高等商業学校から東京商科大学への進学という道はそれなりに一般的であったとみられる⁽¹⁵⁾。

なお、初期の東京高等商業学校・東京商科大学における教授陣・学究者は、一般的に商業学をベースにしながら、貿易論、保険論、経済学、為替論、経営経済学など、もう一つの専門というべき、研究範囲を広く持っている。大泉もその例にもれず、学究者の道を進む中で、商業学から経済政策学へとより広範な領域に広がりを見せるのは、商業学者として首肯されるところでもある。

いずれにしても、大泉は商業学のみならず、経済政策学領域においても著訳書等を以下のように残している。その他関連論文も多い。

(1940)『ワルター・オイケン著・国民経済学の本質』(同文館)

(1943)『ワルター・オイケン著・国民経済学の基本問題』(実業之日本社)

(1951)『経済生活の本質—職能と職分の問題—』(同文館)

(1958)『ワルター・オイケン著・国民経済学の基礎』(勁草書房)

このうち『経済生活の本質—職能と職分の問題—』が中心にある。母校(東京商科大学の後身)一橋大学への1950年学位請求論文を公刊したのものである、内容は以下のようである。

目次

第一部 序説

；経済事象の本質把握に関する問題—社会科学(経済科学)の方法について—

第二部 経済生活の本質に関する職能論的ならびに職分論的理解

第1章 生活の現実に関する基本的考察

第2章 経済および経済生活

第3章 生活の表現形式としての経済

第4章 経済生活の職能論的理解

第5章 経済生活の職分論的理解

第三部 商業の本質把握への適用

第6章 商業の本質

第7章 営利の問題

第8章 商業における職分論

第一部では、本質究明をめぐっての方法論的吟味が行われる。そこでは社会科学の方法論について、科学の成立、自然と社会、自然科学の方法、社会科学の方法、経済科学の方法、社会主義の科学方法と、基本的な大泉のスタンスが明らかにされる。

第一部にみられるように、社会科学の方法論が体系的に展開されるなど、大変にオーソドックスに、基本に忠実である。学問体系自体の未成熟といった状況も勘案しなければならないが、内容の豊かな時代となった今日では不要かもしれないものの、少なからず枝葉末節的な展開が無きにしも非ずといった諸著作とは趣きを異にする。

第二部で本書の中心的課題「経済生活の本質に

関する職能論的ならびに職分論的理解」として、経済生活の本質究明が展開されているが、最後にこうした考察の上で、第三部で「商業の本質把握への適用」として、これまでの商業本質論と密接に関わる内容としていることである。全体構成からは第三部は余分とも思われるが、これまでの研究の筋道を一貫して示しており、『商業本質論』と無縁のものではない。

この点は、1931年の『商業原理講話』、1942年の『商業本質論』、そして1951年の本書『経済生活の本質—職能と職分の問題—』と20年にわたる積み重ねられた長年の成果というべきものである。橋本 勲が「二十余年にわたる過去の不断の研究の上に立ち、その努力の見事に結実された集大成とも云わるべきであろう。その行間に溢れる、温厚、篤実なる学風と共に、著者の独自の研究」であるとした指摘⁽¹⁶⁾は正しい。その経済生活の本質、経済政策学に係わる詳細については本稿主題の域を超えており、これ以上ふれない。

以上から、大泉行雄の業績をつぶさに検討すると、学問領域として3つの峰があると総括できる。第1の峰は、学究初期に行われた思想史的業績であり、ジョン・スチュアート・ミルの研究を主体にしている。小樽高商、および東京商科大学での卒業論文の主題がそれで、これらをはじめとして、のちには大泉(1930)『社会思想家としてのジョン・スチュアート・ミル』(同文館)と一書にまとめられている。こうした初期の研究の発端は、大熊信行の研究のあり様をじっくりと見てきた影響も大きい。大熊の専攻分野は配分原理に中心をおいた経済学であるが、それより前、大熊(1927)『社会思想家としてのラスキンとモリス』を発刊しており、大泉は同様な思考をもってミル研究を結実させていることである(前述の注8参照)。

ついで第2の峰は、その中期での商業本質論の深耕、開拓にあるが、前節にふれたところである。さらに第3の峰は、戦前戦後を通じて一貫する独自の経済政策学に集中していることである。商業学、そして経済政策学研究、そこでの研究上

で大きな分水嶺になったとみられるのが、第二次大戦前の1935～37(昭和10～12)年ドイツ留学時にヴァルター・オイケン(Walter Eucken, 1891-1950, フライブルク大学教授)の知遇を得たことにあると思料する⁽¹⁷⁾。その影響とともに、前述の通りオイケンの著書3冊を日本語訳書として出版している⁽¹⁸⁾。

オイケンによれば、経済という人間生活の一面を把えるにあたって、現実態への沈潜を強く主張する。オイケンは経済を理解するにあたって、その出発点から、経済の概念とか定義とかに捕らえられて、経済の現実態から遊離する方法・態度を極力警戒するという。なによりもまず為すべきことは、経済の現実態のまっただ中へ沈潜することだとする。

こうして大泉にとって第3の峰は、上に述べたように『経済生活の本質—職能と職分の問題—』がその中心にある。

このように、大泉の研究山容は単独峰ではなく、第1, 第2, そして第3の、3つの峰を持ったものと捉えることができる。これらの全領域を詳細に見極めるのは本稿ではなし得ないが、その3つの峰を成す根幹は、経済生活の本質論議というべきところに落ち着くといえる。

4. おわりに

大泉行雄を考察してくると、今日的な流通マーケティング学研究史上、その書名のより強い発信力から商業学者と認識することが妥当だともいえるが、最終的に経済政策学者としても了解される。業績の上で、『商業本質論』より10年前の『商業原理講話』、10年後の『経済生活の本質』と、20年におよぶ「著者の多年の努力と、該博なる学識とに」⁽¹⁶⁾負うものであり、商業学、経済政策学も延長線上にあるといえる。

これまでの内容を要約すれば以下のようなのである。

- ① 大泉行雄は、昭和戦前期に商業学関係文献『商業原理講話』、『商業本質論』、および戦後の『経済生活の本質』を出版してきた。当

初から（それぞれの出版は1931年、1942年、1951年）、その研究方法・対象は大きく変わらず、ひたすら本質を追い求めるものであった。『商業本質論』をその中心において検討してみると、商業は全体経済関係における需要供給の適合作用こそが本質であり、その立場、考察態度は何かといえば、商業の本質を把握するために職能論的方法を採るというものである。職能とは本来全体における位置の獲得とそこでの任務の遂行を意味している。

- ② 大泉の同時代の学者には東京高等商業学校の同窓のものが多く、それぞれに刺激をし合い、当該学問の進化かつ深化に傾注した。古典的配給論の範疇に属する、向井鹿松の配給組織体説、谷口吉彦の商品の社会的移転現象即商業説、福田敬太郎の取引企業説が著名であるが、それらとオーバーラップするものとして大泉の理論的位置づけを与えることができる。大泉の理論は内容として基本的であり、より深みを増したものとなっており、諸説の存在と大きくかけ離れた内容のものではない。とはいえ、大泉の理論・主張は、第二次大戦後に至ってもその存在は向井、谷口、福田の評価に比べ十分とはいえず、忘れられた存在でもあった。

大泉の展開した理論を今日的にどう評価するか。学問研究で、その基本は、それぞれの学問にとっての、いわば哲学や方法論といったところからスタートすることになる。大泉の場合も、商業学とはいったいどのような学問であるのか、また経済政策学とは何か、といった疑問が立ち現れてきていたはずである。そうしたことで明確な輪郭で、その方法論をまずは明らかにするところから始まったとみられる。これらの本質を究明することが、大泉にとって通奏低音となってきたと理解される。

向井、谷口、福田の3者の理論と、大泉の理論との大きな違いは、スタートラインの視点の違いに基づくものである。前者はいわば内からの商業の本質を捉えるのに対して、大泉のそれは全体経

済という外からの捉え方である。それぞれが意味を持つ解釈であると理解できるが、このことはすでに解決・確認されたところである。今日的には、その研究方法・対象の絞り込み等、より基本的基礎的な姿勢にこそ学ぶべき点があると評価したい。現代において、「古き皮袋に新しき酒を盛る」ということではなく、「新しき皮袋に新しき酒を盛る」のが望まれる。そうした学究態度こそが求められる中で、大泉をいま一度再評価すべきだとも思料する。

【補論】谷口吉彦—大泉行雄—橋本 勲の学的系譜

大泉行雄（1901–1979）には、多くの友人知己がいたことは当然ながら、40年ほどと人生の大半を所属した高松高等商業学校＝高松経済専門学校＝香川大学の人的つながり関係について、ここでは谷口吉彦、橋本 勲との関連についてのみ補足しておこう。

商業学確立にあたり注目される文献を明らかにしたのが、当時・京都帝国大学の谷口吉彦（1891–1956）である⁽¹⁹⁾。その1931年出版の『商業組織の特殊研究』において、大泉の商業本質について言及している。これに対して、大泉もまた『商業本質論』で谷口らの本質論について言及している。

他方、橋本 勲（1925–2007）⁽²⁰⁾は、地元の高松経済専門学校に入学、第二次大戦後に卒業し（大泉は軍属にあつて、直接の師弟関係にはない）、そのまま同校に数年勤務していたが、後に東京商科大学に進学。卒業とともに、大泉が教授在職していた母校・香川大学の助手に任用された。1951年に着任して間もない時期（大泉の『経済生活の本質』6月出版直後）に、橋本は「大泉行雄著『経済生活の本質』の問題点」なる論文を明らかにしている（9月14日稿了）。それが可能だったのは、大泉の20年前出版の『商業原理講話』、10年前出版の『商業本質論』著作と、視点は若干違えども一貫した展開内容であったことによる）。

以後、橋本は香川大学で講師、助教授を歴任している。

また、谷口吉彦は、第二次大戦前からの京都帝国大学教授を、戦後に公職追放で退職、その後、甲南大学、大阪市立大学に短期勤務しているが、1955年に香川大学の学長として迎えられる。谷口は地方国立大学である香川大学（伝統ある師範学校と、高等商業学校を母体とする）のあるべき姿を求め真摯に執務するのである。しかし、そうした思いも中断し、1年半後、急病、彼岸に旅立つに至っている。大泉は谷口逝去後に追悼文と、「谷口博士と商業の本質」なる論文（谷口への追悼論文でもある。『香川大学経済論叢』第30巻2・3号、所収）を1957年に明らかにしている。こうした具合でそれぞれの関係が深い。谷口急逝に対して、大泉は経済学部長の職にあつて、学長事務取扱として、さらにその後も（2期6年）学長を務めている。

これとは別に、谷口が最晩年1953年に出版した『配給通論』（この前著にあたるのが『配給組織論』1935、千倉書房）は、名著の一つとして没後も再刷され続けるが、その過程で何度か橋本勲の手で増補筆されている。香川大学の助手、講師、助教授、さらには京都大学での助教授時代にも橋本はこれに助力している（橋本はのちに、自著『現代マーケティング論』等にこれらを加筆修正のうえ収録している。なお蛇足ながら、京都大学の商業論講座は、谷口、その門下の松井清⁽²¹⁾、続いて橋本がその衣鉢を継ぐといった系譜がみられる）。

このように、谷口吉彦、大泉行雄、橋本勲の三者は、「研究の場」とともに「教育の場」においても三者三様の関わりが強いことである。こうした点から、高松高商＝香川大学を軸にした学統とも言える系譜とみることができる⁽²²⁾（年齢構図的には、大泉の10歳上が谷口、大泉の二回り下が橋本である）。

《注》

- (1) マーケティングとは何かについては、論者によって種々多様であるが、ここでは、日本的な商業・流通論的側面をも含めた、より広範なマーケティングとして扱う。

かねて出版した小原を含む共同研究書に、マーケティング史研究会編（1998）『マーケティング学説史—日本編—』（同文館出版、増補版2014年）がある。この著作は、日本におけるマーケティング学説を交通整理すべく、その主要な最初期のマーケティング学者（その端緒ともなった商業学者）を取り上げ、9章にわたってそれぞれの学者の理論を詳述・展開しており、また現代的にも評価するという歴史的視点による研究書である。

その「はしがき」において、「執筆者側の都合で」日の目を見なかったと言及されていたのが、大泉行雄であった。この共同研究書を『日本編・第1集』と称すれば、そこで取り扱えなかった一学者・大泉行雄は、来るべきその『日本編・第2集』発刊の折には、追加的に検討されるべき学者の一人である。本稿はそのために草した暫定稿である。

- (2) ゲーテ（Johann W. Goethe, 1749-1832）による "Die Gershichte einer Wissenschaft ist Wissenschaft selbst" の文言。Goethe (1810) *Zur Farbenlehre*, 木村直司 (2001)

『色彩論』まえがき p.104, 筑摩書房。または高橋義人・前田富士男訳（1991）『色彩論』（完訳版）第一巻（教示篇・論争編）緒言 p.21, 工作舎。

周知の通り、ゲーテはドイツを代表する世界的な文豪（詩人・劇作家・小説家）であり、小説『若きウェルテルの悩み』、詩劇『ファウスト』など魅力あふれる作品を残している。のみならず、『色彩論』にみられるように自然科学や、さらに政治・法律領域での活動など幅広い。

参考；小原博（2010）「歴史的視角からのマーケティング」『同志社商学』第61巻6号、3月、p.42。

- (3) 大泉行雄は、大泉安行とハツエを父母として、1901（明治34）年11月30日、旭川にて9人兄弟の長男として生まれたが、家族は彼の幼時に小樽に転居し、長く住まいした。成人独立しての新たな家族は、静との間に3人の子（慎之介、道哉、昌子）を持ち、それぞれ有為な人生を送ってきた。大泉は1979（昭和53）年2月9日に心筋梗塞により、横浜市神奈川区六角橋の自宅にて逝去した、享年77。なお、長女・昌子の夫は経済政策学者の稲毛満春（香川大学を経て、名古屋大学。名誉教

- 授, 1929-, 2009年に叙勲して後に逝去)。
- (4) 大泉の人となりについては, 大泉門下で, 社会思想史学者, 同じ香川大学教授の木村正身(1920-2003)の論考がある。研究上のそれに関連して「平素したしく教導をいただく身として…圧倒されてしまう」とも評している。木村正身(1959)「書評; 大泉行雄訳オイケン著『国民経済学の基礎』」『香川大学経済論叢』第31巻第5号, 1月, p.114。また別に, 木村(1964)「大泉博士と経済生活本質理論」『香川大学経済論叢』第37巻第2・3合併号(大泉行雄博士記念号), 8月, がある。
- この他, 大泉行雄博士還暦記念論文集編集委員会(1963)『経済政策の現代的課題』勁草書房, の序文で, 人となりについて「たんなる経済理論のための経済理論家といった人ではない。学説をみずからの公私の生活の場に, 巨細をとわず身をもって犀利に実践検証されなければやまない人であり, 不断に独りを慎まれる自省の人である」(序 p. ii)との紹介がある。
- (5) 大泉行雄自身のエッセーは多く, 大泉(1933)『個人発見と社会発見』; (1935)『世にも利口な男の話』; (1939)『独逸及び独逸人の問題』いずれも同文館。(1967)『自然と人と生活』勁草書房, などがある。
- (6) 大泉行雄『商業本質論』(同文館, 1942年4月, 初版3,000部, ㊦¥2円20銭)。その初版発刊の30年後に学究者の入り口にあった小原は, 神田神保町で入手している。研究対象の本質をどうつかむかという当面の課題の中で, ただただ書名の魅力にひかれてのことで, 当初はその位置づけさえもまったく不明であった。汚れない状態で, 幸いに箱入り帯付きであり, 箱に印刷された大泉の肩書は「高松高等商業学校教授」である。
- (7) 大泉行雄の商業本質論に関連するそれ以前の論文は以下のようである。
- (1929a)「商及び商人」『商学討究』第4巻上冊, 7月。
- (1929b)「商業の本質に関する最近の二論—福田敬太郎, 向井鹿松両氏の所説に就て—」『国民経済雑誌』第47巻第4号, 10月。
- (1930)「商業の本質に就て」『商学討究』第5巻上冊, 10月。
- (1934)「社会的職能分担者としての商業」高松高等商業学校開校十周年記念論文集『商工経済研究』第9巻第3・4合併号特輯, 10月。
- (1939)「商の概念について—福田教授の所説を中心として—」『一橋論叢』第4巻第5号, 11月。
- (1940)「商業における職能と職分」日本経営学会年報『経営学論集』第14輯(価格統制)同文館, 4月。
- (1941)「商業と営利の基本的関係」『一橋論叢』第8巻第3号, 9月。
- (1942)「商業本質の職能論的把握」上田貞次郎博士記念論文集第1巻『経営経済の諸問題』科学主義工業社, 10月。
- (8) 大熊信行(1893-1977)は, 東京高等商業学校(東京商科大学の前身)を卒業, したがって大泉行雄の先輩にもあたる。小樽高商では1921年に講師, 翌1922年に教授, 1923年には病気で退職と勤務は短い。その後, 1927年に高岡高等商業学校教授, (さらにはその後身)富山大学経済学部教授と続く。戦後には, 公職追放後, 富山大学経済学部長や, さらに神奈川大学, 創価大学にも勤務する。大泉行雄も学生生活晩年に同じ神奈川大学に籍を置くことにもなり, 緊密な関係は続くのである。このことは, 大泉の還暦記念論文集(1963)の書名題字は名書家の手になるような達筆なものであるが, この大熊信行が揮毫していることにもみられる。
- 大熊の専攻分野は経済学であるが, それより前, (1927)『社会思想家としてのラスキンとモリス』(新潮社)があるように研究は広範である。さらには, 歌人としても口語自由律短歌を世に送り出すなどしており著名であるという。没後に歌集『母の手』(短歌新聞社)が刊行されてもいる。
- (9) 室谷賢治郎(1942)「大泉行雄教授の『商業本質論』」小樽高商『商学討究』第17巻上冊, 8月, p.133。なお, 室谷賢治郎(1900-1975)は, 東京高商および東京商科大学を卒業し, 小樽高商・小樽商科大学教授。また札幌商科大学学長など歴任。その主著は, (1935)『経営経済学概論』同文館, (1937)『商学提要』同文館など。
- (10) 旧制・高等商業学校は, 1887(明治20)年に東京に創立(商法講習所, 東京商業学校を前身としての高等商業学校に)された後, ようやく1902(明治35)に神戸高商, 1905(明治38)年には山口高商と長崎高商に, 1910(明治43)年に小樽高商と, 官立校が明治時代に続く。さらに大正時代(1912-1926)には, 福島, 横浜, 高岡, 名古屋, 彦根, 和歌山, 高松, 大分と官立高等商業学校が各地に創立される。公立校では1904(明治37)年に(市立)大阪高商, 1928(昭和3)年に(市立)横浜高商, 1929(昭和4)年に(県立)神戸高商が創立されている。また私立校では1912(明治45)年

- に高千穂高商, 1919 (大正 8) 年に大倉高商, 1922 (大正 11) 年に松山高商, 昭和に入ってから 1928 (昭和 3) 年に巢鴨高商, 1932 (昭和 7) 年に浪速高商がそれぞれ創立している。なお, これらの時期に, 旧制・私立大学では商科 (商学部) が別途展開されているのはいうまでもない。参考; 国立教育研究所編 (1973) 『日本近代教育百年史; 産業教育 (1), (2)』文唱堂。天野郁夫 (1978) 『旧制専門学校』日本経済新聞社。
- (11) 小原 博 (1997) 「日本流通学史研究序説—草創期の高等商業教育と流通研究—」拓殖大学『経営管理研究』第 58 号, 6 月に詳しい。他に, 小原 (1997) 「日本流通学史草創期の一齣—初期高等商業教育と流通研究—」日本流通学会編『流通』第 10 号, 9 月。小原 (2005) 『日本流通マーケティング史—現代流通の史的諸相—』中央経済社。
- また, 内池廉吉の学説史研究については別稿で詳述している。小原 (1998) 「内池廉吉—商業学の白眉・社会経済的マーケティング論へ—」『マーケティング学説史—日本編— (増補版 2014)』同文館出版。
- (12) 森下二次也 (1974) 「わが国商業論研究のあゆみ」『書齋の窓』第 233 号, 8 月号。荒川祐吉 (1974) 「日本における『商品流通研究』展開の潮流」荒川編『流通研究の新展開』千倉書房, p.24。薄井和夫 (2006) 「戦前期の商業学・配給論とドイツ後期歴史学派—わが国社会政策論 (上)」埼玉大学『社会科学論集』11 月。
- なお, 「巨大なる学峰」と称された彼らの初期の主著は, 向井鹿松 (1928) 『配給市場組織』丸善; 谷口吉彦 (1931) 『商業組織の特殊研究』日本評論社, (1935) 『配給組織論』千倉書房; 福田敬太郎 (1930) 『市場論』千倉書房, (1931) 『商業概論』千倉書房, などがある。
- (13) これら商業の本質学説に関しては以下を参照されたい。荒川祐吉 (1974) 「現代商業の本質と其の一般形態」『商業学—現代流通の理論と政策』有斐閣。荒川祐吉 (1988) 『流通研究の方法論』千倉書房。白石善章 (1984) 「商業学」田村正紀・石原武政編『日本流通研究の展望』千倉書房。
- また, 向井, 谷口, 福田, さらに内池らについては, それぞれの学説が別途論じられている。マーケティング史研究会編 (1998) 『マーケティング学説史—日本編— (増補版 2014)』同文館出版, 所収。
- (14) 大泉の評価が十分とはいえない, その理由は何か。理論的に明確な主張をする諸説に比べ見劣りしたのか, あるいは, 高松・香川の所属に関わる
- とする見方の故か。前注 12 の論者のまとめにみられるように, 戦後の規定でも, 大泉の存在感は希薄であると言わざるを得ない。
- (15) 旧制・高等商業学校から商科大学への道に対して, 有力ともいえる旧制・高等学校から帝国大学への道, といった大きな道筋がある。大泉の辿った前者の道には, たとえば, 福田敬太郎, 橋本 勲 (後にふれる補録, 参照) や, 木村正身 (注 4 参照), さらに学界人ではないが大平正芳などがいる。
- 橋本 勲, 木村正身, 大平正芳は, とともに同じ高松高等商業学校 (=高松経済専門学校) を卒業して後に東京商科大学に進学している。大平正芳 (1910-1980) は, 高松高商における大泉行雄の門下である。東京商大卒業後に大蔵省に入省, 後に政治家, 内閣総理大臣になっているのは周知のところである。
- 商業学の泰斗・福田敬太郎 (1896-1980) の場合は, 神戸高等商業学校を卒業後, 1920 年に (東京商科大学に昇格前の) 東京高等商業学校・専攻部を卒業, 母校神戸高商教授となっている。この福田と同じ経歴を持つ同級生に (神戸高商および東京高商・専攻部と一緒に学んだ), 平井泰太郎 (1896-1970), 宮田喜代蔵 (1896-1977) がいる。ともに神戸高商, 神戸大学教授として, 平井・経営学, 宮田・経済学, 福田・商学の各領域で活躍され, その名を遺した。
- (16) 橋本 勲 (1951) 「大泉行雄著『経済生活の本質』の問題点」『香川大学経済論叢』第 24 巻第 3 号, 11 月, p.68。別に橋本による大泉の経済政策論についての検討は, (1963) 「経済政策論の方法にかんする—考察—」大泉行雄博士還暦記念論文集『経済政策の現代的課題』勁草書房, 所収, がある。
- (17) ヴァルター・オイケン は, 古典派経済学の数理論的アプローチ, ドイツ歴史学派の歴史的アプローチを批判し, 実際の市場経済を観察するという, オルド自由主義で名高い (オルドは秩序のこと)。オイケン は, 1991 年にはドイツにおいてその生誕 100 周年として記念切手になるなど著名である。オイケンの業績については, 以下を参照されたい。黒川洋行 (2010) 「ヴァルター・オイケンとオルド自由主義の経済政策」『経済系: 関東学院大学経済学会研究論集』249 号, 10 月; (2012) 『ドイツ社会的市場経済の理論と政策—オルド自由主義の系譜』関東学院大学出版会。
- (18) ヴァルター・オイケン 著作の大泉による翻訳は, (1940) 『ヴァルター・オイケン著・国民経済学の本質』; (1943) 『国民経済学の基本問題』; (1958)

『国民経済学の基礎』、と3冊出版された。このうち3冊目の『基礎』は『基本問題』の新版であるが、オイケン逝去後の翻訳になってしまった。とはいえ、エディット・オイケン (Edith Eucken) 夫人がその「日本訳版序」において、オイケンの元に研究に来た日本人学究者の研究に対する姿勢やあり様を、生前に感動を持っていたと記している。また、大泉は「訳者小引」において訳出用語の難しさを記しているが、ドイツ語力は言うまでもない。

また、オイケンの著書としては、その逝去後に、エディット夫人らの手により出版されたものとしてオイケン (1967) 『経済政策原理』勁草書房、がある。その日本語訳書、訳者は異なり大野忠男による。

大泉によるオイケンの吟味は、以下の啓蒙論文にも見られる。大泉 (1957) 「オイケンの経済思想と日本経済」『経済往来』経済往来社、第9巻第11号、1月；(1971) 「ワルター・オイケンと『経済政策原理』」神奈川大学『商経論叢』別冊、3月。

- (19) 谷口吉彦は苦労人であったと評するのは三浦信である。三浦 (1998) 「谷口吉彦—社会経済学的配給論の建設を目指して—」マーケティング史研究会編『マーケティング学説史—日本編— (増補版2014)』同文館出版。谷口の経歴・業績は、その没後に京都大学『経済論叢』第79巻3号、1957年3月、に掲載されている。
- (20) 橋本 勲は、(高松高等商業学校の後身) 高松経済専門学校を経て、1951年に東京商科大学を卒業、香川大学に奉職し、その後1962年に京都大学に転籍している。その著者は (1969) 『商業資本と流通問題』ミネルヴァ書房、(1971) 『現代商業学』ミネルヴァ書房、(1973) 『現代マーケティング論』新評論、(1975) 『マーケティング論の成立』ミネルヴァ書房、(1983) 『販売管理論』同文館出版。
- (21) 松井 清 (1912-1972) は、1936年に京都帝国大学を卒業し、そのまま京都大学に残る。谷口吉彦の門下で、後に外国貿易論、国際経済論に研究関心を移す。流通マーケティング学領域では以下がある。松井 (1963) 『増訂・商業経済学概論』有信堂。(1964) 『経済学とマーケティング』三一書房。(1966) 「あとがき (谷口吉彦『配給通論』)」千倉書房。また松井 清追悼論文集として、秋本育夫・橋本 勲編 (1973) 『独占とマーケティング』有信堂、がある。
- (22) 香川大学の沿革については、(1977) 『香川大学経済学部五十年史』、(1982) 『香川大学三十年史』、(2000) 『香川大学五十年史』など参照。

★ さらに今般、関係者にヒアリングを行ってい

るが、大泉行雄の活躍した現役時代からすでに半世紀近くが経っており、知る人は少なく、残念ながら学界でも『商業本質論』の著書を知るのみで、新しい知見を得ていない。

関係者と思われたうち、近藤文男 (現・京都大学名誉教授、1939-) は、香川県観音寺市生まれで、大泉行雄学長、橋本 勲経済学部助教授が在職していた地元の香川大学に1959年に入学している。だが学生の立場であったため両者については十分には知り得なかったという (なお、近藤が香川大学在学中に、橋本は京都大学に転籍している。その後、近藤は同大学を卒業し、京都大学大学院に進学している)。

また、第二次大戦の戦前から戦後にかけて京都大学経済学部在学した三浦 信 (京都産業大学名誉教授、1925-2018) は、谷口吉彦の商業経済学講座を受講 (テキストは『配給組織論』) しているが、大泉に関する話は直接には聞いていない。三浦は助手として研究スタートした関西学院大学において、指導教授であった池内信行 (ドイツ経営経済学史) が大泉行雄の業績に対して高い評価をしていたという (2017年3月31日付け私信・2018年1月27日逝去)。

[なお、近藤文男の著者としては、(1988) 『成り立ちマーケティングの研究』中央経済社、(2004) 『日本企業の国際マーケティング』有斐閣。三浦信の著者としては、(1963) 『現代マーケティング論』ミネルヴァ書房、(1971) 『マーケティングの構造』ミネルヴァ書房、などがある。]

この他、大泉の関係縁者にもあたっているが追究しきれていない。

《付記》

薄井和夫博士の埼玉大学ご定年退職をお祝い申し上げます。大学院生時代からマーケティング論の理論的深耕に尽くされてきました。とりわけ、マーケティング史研究の第一人者というべき存在であり、この30年ほどは日・米におけるマーケティング史研究・学会での活躍は知る人ぞ知るところであります。永年近くで (大学院修了直後から今日まで)、真摯な姿をみてきており、かつ同じ歴史研究による接近方法を取ってきた者としては、ご定年を迎えられたことに、ひとしお感慨深いものがあります。今後もご家族を大切にされながら、健康に留意し、さらなる研究・教育に献身されるよう祈念しております。

小原 博 (拓殖大学名誉教授)

《Summary》

A Historical Study of Marketing Thought in Japan:
Focusing on Dr. Yukio Oizumi

KOHARA Hiroshi

This paper explores the birth and development of marketing theory, especially with regard to the theory of Yukio Oizumi. Professor Oizumi (1901–1979) published many books on commercial science: *Commerce Principles Lecture* (1931), *Commercial Essence Theory* (1942), and *The Essence of Economic Life* (1951). Oizumi's approach is to view commerce in terms of functioning theory.

Commerce is part of a human society's life, and it changes with time. However, what changes is the expression of commerce; there are elements which remain unchanged. The essence of commerce refers to this unchanging element.

This essence can be said to be the conforming of supply and demand in overall economic relations. This is a function of commerce. The emphasis in this function is that jobs function not merely as activities, they play a role in creating the whole.

Finally, among the so-called classical distribution theories of Shikamatsu Mukai (business organization and management theory – 1928), Kichihiko Taniguchi (the social transfer of goods theory – 1931), and Keitaro Fukuda (trading company theory – 1931) but overlapping with them, we can find Oizumi's theoretical position. Oizumi's theory seems not to differ so much from these theories of Mukai, Taniguchi, Fukuda, but it has not been sufficiently evaluated since World War II.

Keywords: marketing thought, science of commerce, commercial function, distribution theory